



# 實 踐 運 動 編

じっせん うんどう へん  
〔実践運動編〕

第1章 おんどう ぼう じっせん うんどう  
御同朋の社会をめざす運動 (実践運動)

◆現代社会の共通認識	実践運動編	1 (71)
◆宗門 <small>しゅうもん</small> の取り組み	//	1 (71)
①同朋 <small>どうぼう</small> 運動のはじまり	//	1 (71)
②門信徒 <small>もんしん</small> 会 <small>かい</small> 運動	//	3 (73)
③基幹 <small>きかん</small> 運動	//	4 (74)
◆新たな実践運動 <small>じっせん うんどう</small> への展開	//	5 (75)
①宗門 <small>しゅうもん</small> の願い	//	6 (76)
②重点プロジェクト基本計画 (推進期間2011 (平成24) 年度から2014 (平成26) 年度までの3年間)・・・	//	7 (77)
③総合テーマ	//	7 (77)
④重点プロジェクトの「実践目標」設定	//	8 (78)
⑤宗門 <small>しゅうもん</small> の課題リスト	//	9 (79)

ひょう ごきょうく  
第2章 兵庫教区の取り組み

◆兵庫教区御同朋 <small>おんどう ぼう</small> 総結集大会	実践運動編	13 (83)
◆本願寺 <small>ほんがん じ</small> 神戸別院 <small>こうべ べついん</small> ・兵庫教区教化センター完成記念慶讃御親 <small>きょうざん ごしん</small> 修法 <small>しゅうぼう</small> 要・・・	//	14 (84)
◆蓮如上人 <small>れんにょ じょうにん</small> 500回遠忌 <small>おん き ぼう ぼう</small> 法要	//	14 (84)
◆第2回兵庫教区御同朋 <small>おんどう ぼう</small> 総結集大会	//	15 (85)
◆兵庫教区御同朋結集二千人大会・同朋運動五十周年記念大会・・・	//	15 (85)
◆兵庫教区御同朋 <small>おんどう ぼう</small> 総結集一万人大会	//	15 (85)
◆第19回全国仏教壮年兵庫大会 <small>ぶつぎょう しょうねん</small>	//	16 (86)
◆長島愛生園 <small>ながしま あいせい えん</small> ・邑久光明園西本願寺会館50周年記念の集い・・・	//	16 (86)
◆差別発言事件 <small>さつべつ げんごん じけん</small> の惹起 <small>じやつき</small> について	//	16 (86)

しんらん しょうにん だい おん き ぼう ぼう  
第3章 親鸞聖人750回大遠忌法要関連 実践運動編 18 (88)

## 第1章 御同朋の社会をめざす運動（実践運動）

### ◆現代社会の共通認識

2012（平成24）年度から宗門は、新たな運動として「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）を、掲げました。

#### スローガン「結ぶ絆から、広がるご縁へ」

変化の速い時代状況の中、宗門が取り組むべき社会的課題は、山積しています。今の社会を見ますと、少子高齢化や地域人口の過疎過密問題をはじめ、経済格差による生活の不安定化、自然災害からの防災対策、人々の心の問題や絆の希薄化など、国内に止まらず国外では武力紛争をはじめ、環境破壊や人権侵害が拡大しています。こうした時代の変化の中で私たちは、現実をどうとらえて生きていくのでしょうか。

例えば、少子高齢化の問題は、人口構造を変化させ、今までできていたことができない社会に成っていくと云われています。いわゆる団塊世代の方々がすべて75歳以上となる2025年頃を念頭に、家族が病院で最後を看取られていた状況が、自宅で最後を迎えるような環境に変えざるを得ないという政府は見通しを立てています。また少子化は、家族や親族の支え合いを変え、人間関係を作り直さなければ、共に生きていくことができなくなると予測されています。にもかかわらず世代間の価値観の相違により、人々が気持ちの共感をしあったり、地域や家族の伝統や課題の共有が互いにしにくくなってしまった現実があります。しかし、「ご縁」に結ばれ生かされてきた私たちの社会が、今後益々「ご縁」を大事にし、心の壁を越えて、御同朋の輪を広げていかなければならない状況だと云えます。

また、気候変動による豪雨災害や地震災害など緊急時の避難は、一人でできないことも考えられます。地域の人同士の助け合い無しには避難所への待避や救助もできません。阪神淡路大震災や東日本大震災の教訓を私たちは決して忘れてはならないと思います。

『浄土真宗の教章』にありますように「自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」ということは、私たち宗門の願いであると同時に共に生きる人々の願いでもあるのです。

### ◆宗門の取り組み

#### ① 同朋運動のはじまり

宗門の歴史は宗祖親鸞聖人の教えに信順し、「御同朋御同行」と阿弥陀如来の本願を仰いで、ともに人生をお念仏に生かされた多くの門信徒の集まりでした。それは、真にお釈迦様の時代の人間平等を基本精神として集合した仏教教団（僧迦）と等しい集団でもありました。しかし、時代が経つにつれてその時代の影響、特に「宗門改め制度」や権力闘争の中に、教団の原点である同朋精神の姿から離れていくことになりました。本願寺教団の維持と寺院や門徒の支配を優先するあまり、本

来の宗祖親鸞聖人のあるべき姿と徐々に懸け離れていきました。封建時代の中に於て内向的となった信仰は、幕藩体制の抑圧に対して批判の意識や改革の願いを縮小消滅させ、無批判に現実を受け入れる信仰のあり方を肯定していくように成っていきました。

世の中は明治維新とともに、差別と抑圧を強いられてきた人々や被差別部落の人々の中から、人間の平等と過去の時代の反省を求める運動が起こってきました。「全国水平社」の結成の動きでありました。時代は変わっても、封建遺制の本願寺教団の体制は、まだまだ改革のない状況が残っていました。浄土真宗本願寺派内では、全国水平社の発足を受けて1924（大正13）年10月「西本願寺一如会」を設立して、「親鸞聖人の教義に基づき、専ら人間相愛の精神を普及し、社会での安寧と文化の向上を図る」ことを目的とし、宗教的立場で、融和運動の推進をしていきました。（融和主義的教育は、部落の人に対し、差別されないように服装や態度を改めることを求め、部落外の人に対して、差別されている人への同情と融和の気持ちを持つことを求めたとして批判されました。）

その後、第二次世界大戦時は、戦争肯定の国家体制になり、本願寺教団も、軍国主義の国政に、抵抗することはできませんでした。敗戦により、日本が民主主義国家として動き出したことに伴い、「一如会運動」は、懺悔的融和運動に終わった反省の上になって「浄土真宗の本旨に則り、同朋運動を提唱して、人類相愛の精神を宣揚し、自由と平等とを、基調とする文化社会の建設に寄与する」ことを目的として、1950（昭和25）年4月「浄土真宗本願寺派同朋会」を設立しました。そこでは、「同朋主義の徹底・同朋精神の顕現・同朋意識の顕揚」が基本とされました。

その後の活発な運動により、1957（昭和32）年4月14日『第2回全国同朋大会』において『同朋運動の消息』が發布され、「同朋会」活動は、「同朋運動」として教団全体に展開されていくことになりました。1971（昭和46）年4月、「同和对策審議会答申書」を受けて、国民的課題である同和問題に強力に取り組むことを目的にしながら、教団の差別構造や差別意識を問う運動として、宗門機構内に同朋運動本部同朋部が設置されました。

「差別・被差別からの解放」それは、差別する側と差別を受ける側の対立する関係を作っている社会的集团的構造や事象をいつまでも温存・助長している原因をなくし、互いが平等の視点にたって生きていくことができる教団を目指すことであります。この願いを同朋運動の基本とし、あらゆる差別の現実を見抜き、その原因を取り除くことにより、実態面や心理的な差別を解消していくことが目的として推進されてきました。教団自らが、歴史上、社会の中で部落差別をはじめとしたいろいろな人権問題を温存助長してきた反省に立って、今後も積極的に取り組まなければならないなりません。

## ② 門信徒会運動

親鸞聖人700回大遠忌法要が、1961（昭和36）年の4月にご本山におきまして勤められました。その法要を契機として、私たちの教団を伝道教団という本来あるべき姿に帰していかなければならないという願いから、この運動が始まりました。

その時の勝如ご門主の「親鸞聖人700回大遠忌法要御満座の消息」では、「宗門の積極的な活動を実践する上には、何よりも眞実信心の喜びに生き、ご法義の繁盛に情熱を傾ける人を育て上げることが第一であります。僧侶は教化をみずからの使命と自覚し自信教人信の実践に徹すべきであり、門徒もまた、形だけの門徒にとどまらず日々の日暮らしの中に、お慈悲を仰ぐ信心の喜びを生かし、うるわしい信仰生活をうちたてるとともに、一人でも多くの人に尊いみ教えを伝え、相携えて、念仏にうるおう社会を作りあげなくてはなりません。」

というお言葉をいただきました。

宗祖親鸞聖人や蓮如上人の時代、本願寺教団は、教団に属する全ての人が、熱心に教えを聞き、また熱心に教えを伝えてきました。つまり全員が聞法すると同時に、全員が伝道するという教団でした。このような姿の教団を「伝道教団」と云います。教団を形成している門徒、僧侶、寺院が一つになり、私たちのあり方を改めようと、門信徒会運動が、始まりました。この運動は、「親鸞聖人の生き方に学び、つねに全員が聞法し全員が伝道して、わたくしと教団の体質を改める運動です。これによって、同朋教団の眞の姿を実現し、人類の苦悩を解決することをめざしています。」と推進されてきました。

1964（昭和39）年の勝如ご門主のお言葉には、

「新たに誕生した門信徒会運動は、従来のような主として財政協力のためのものではなくて、寺院そのものの全般的な活動、とくに、なんと言っても寺院は聞法の道場ですから、そういう意味で、ご法義をひろめていく上に、この門信徒会が大きな役割をはたすように工夫してゆくことが大切であります。」と述べられています。

言うまでもなく、生涯聞法の体系のなかで、教化組織づくりは大切な活動の場にあります。従来からの仏教婦人会活動をはじめとし、保育連盟、少年連盟、スカウトクラブ、仏教青年会、仏教壮年会など、いろいろな共通点をもった人の集まりを通して、生涯聞法を続けていける教化組織作りを全国のお寺に呼びかけ、取り組みの要としてきました。

また、浄土眞宗の教義と作法を学ぶことを目的に、兵庫教区が連研の前身である「連続学習会」を全国に先駆けて開催し、それを受けて1974年（昭和49）年には、「連続研修」がはじまり、「門徒推進員養成講座」という新しい取り組みに発展しました。組単位で開催する「組連続研修会」と、本山での開催が「中央教修」と呼ばれ、各組において2年間、一定の門信徒の方々と僧侶とがみ教えを「問い、聞き、語る」という宗祖親鸞聖人当時の布教形式だった寄合談合のような「話し合い法座」形式のご法座が開かれるようになりました。そこで、宗門の門信徒会運動と同朋運動を習得していただき、門徒推進員として社会の中で運動を推進していただくことが

願われました。2014（平成26）年度現在、全国で登録していただいている門徒推進員は9,000人を越えていただいております。

兵庫教区におきましては、第1期の組連研の修了者の中央教習への勧めとしてご本山の本願寺会館にて「連研修了者大会」を隔年に開催してきました。「帰敬式」の受式も行い、多くの参加をいただきました。現在は、本願寺会館が、「龍谷ミュージアム」になり、神戸別院にて開催を継続しています。

### ③ 基幹運動

「同朋運動」と「門信徒会運動」の両運動の展開は、宗門内に於て一体的に取り組みを進めていく必要性が生じてきた中で、1980（昭和55）年の伝灯奉告法要に際し、即如ご門主さまは『教書』において、「基幹運動」と呼称され、1985（昭和60）年に基幹運動本部が設置されました。教団は基幹運動計画を作成し、教団の運動体制を整えました。計画書の定義には、

「基幹運動とは、本願を究極の依りどころとして生きられた親鸞聖人に学び、つねに全員が聞法し全員が伝道して、わたくしと教団の体質を改め、差別をはじめとする社会の問題に積極的にとりくみ、御同朋の社会をめざす運動です」として「御同朋の社会をめざして」との目標と「念仏の声を世界に子や孫に」とのスローガンを掲げて、両運動が一本化して推進されることになりました。

基幹運動体制のもと宗門では、連続研修会や教化団体の拡充、ビハーラ活動の推進、基幹運動僧侶研修会の実施、干鳥ヶ淵全戦没者追悼法要や平和の集いの定例化、門信徒会運動研修協議会の実施など、多くの活動が展開されました。そうした取り組みの中で、教団内に残る差別問題や僧侶の意識、教学の問題性が指摘されました。

1997（平成9）年、全寺院を対象に実施された「差別法名・過去帳再調査」は、私たちが、現実の問題に目を向けて基幹運動を推進し、私と教団の体質を改める必要性を認識させるものでした。1979（昭和54）年の米国での第3回世界宗教者平和会議において全日本仏教会代表者の差別発言を契機として、日本の宗教界の差別体質が問われました。このことから「同和問題に取り組む宗教教団連帯会議（同宗連）」が結成され、教団の枠を超えて差別・被差別からの解放にかかる、宗教間の連帯活動が進められました。

教団に於ても1983（昭和58）年から3年間をかけ全寺院を対象に墓碑・法名・過去帳の記載事項の調査が行われました。この取り組みから過去帳差別記載糾弾学習会、同朋三者懇話会などの学習会が生まれ、そこでの問題提起から、「各寺院のご住職方は、過去帳内の差別性を認識した上で、回答したのだろうか」「差別の温存助長につながる問題で、身元調査に悪用されるかも知れない個人情報過去の過去帳でもあるのでしっかりとそのことを認識して、調査に答えて欲しい」など、一度目には行わなかった事前学習会の受講や問題点の学びをしての「差別法名・過去帳再調査」が行われました。その結果は、差別法名が、過去帳記載11件、墓石では131件の報告がありました。また、差別添え書きは、65ヶ寺から802件の報告がありました。

江戸時代から明治大正昭和時代にかけて書き添えされたものとは言え、「閲覧禁止」という宗門の法律で護られていますが、書き替えの義務と本山保管の方法が取られています。差別につながる添え書きについては、その数を遥かに超えるものでした。こうした事実を同朋教団を標榜してきた宗門は、原因の究明をして行くと同時に、同朋精神に生きられた宗祖親鸞聖人に学びながら、自己と社会の差別に目を開いて、差別解消の取り組みを推進することであり、それが差別に苦しんできた人々に対し、謝罪していく道であり、信頼を回復する営みともなると思います。過去帳調査の中で提起された多くの課題は、教学面にも踏み込んだものでした。ここでは説明できませんが、私たちは、信心と現実の生活とを切り離して考えているのではないのでしょうか。そんな現実には阿弥陀如来の慈悲と智慧のはたらきは、どう呼びかけているのでしょうか。念仏者の社会性が、一つの問題に向き合った時、自分の自己中心性が見えてきませんか。気付かされたその時、じっと立ち止まっているのではなく、み教えに学び、ともに行動し運動に参加していくことにより、変革されていく念仏者が誕生するのではないのでしょうか。

### ◆新たな実践運動への展開

基幹運動から今後の運動展開への提言について、宗門人の危機意識と、急激な社会状況の変化に対応し、宗門に所属するすべての人々が参画し、活性化につながる基幹運動となるために、2009（平成21）年に設置された「基幹運動の今後を考える協議会」から意見具申がなされました。

- ① 「全員聞法・全員伝道」の実践を重ね、宗門内の人々が教えに出会った喜びを分かち合い、宗門外の人々にもその喜びを伝えていくことが重要である。それが「伝えようお念仏の喜びを」の実践であり「新たな百万人の門徒の誕生」につながるのである。そのためには、すべての宗門人が浄土真宗の教法を聞信し、他の人々に布教・伝道するための具体的方策が必要である。
- ② 基幹運動が、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する運動となることで、宗門の社会的責務を果たすことができるのである。現前の事実には立脚し、信仰に依拠した運動であるためには、基幹運動の理念が宗門人の信仰理解や教学の課題として共有されながら進められる必要がある。

と以上の提言がなされました。次代の運動を模索しながらも宗門は、親鸞聖人750回大遠忌法要の団体参拝が、全国から行われました。

2012（平成24）年1月16日、親鸞聖人750回大遠忌法要が円成し、同年4月1日より、本願寺と宗派は、新たな50年を切り開くべく、新体制、新組織のもとで、実動を開始しました。その中で、宗務全体の基本理念が「実践運動」として示され、また実践運動の中で新たな活動を具体的に展開していくために「重点プロジェクト」が組織されるにいたりしました。

次に「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）総合基本計画を紹介します。

## ① 宗門の願い

浄土真宗本願寺派では、1986（昭和61）年より「御同朋の社会をめざして」という目標を掲げ、「基幹運動（門信徒会運動・同朋運動）」を進めてきました。このたび、その成果を継承し課題を克服するため、運動名称を「御同朋の社会をめざす運動（実践運動）」と改め推進することとなりました。

宗祖親鸞聖人は、混迷した世の中であって、ともにお念仏を喜ぶ仲間を「とも同朋」「御同行」と呼び、苦悩する人々とともに生き抜かれました。私たちの先人はそのお心を受け、「御同朋・御同行」と互いに敬愛し、み教えをまもり広めていこうと努めてられました。「御同朋の社会をめざす運動」とは、いのちの尊さにめざめる同朋一人ひとりが自覚を深め、浄土真宗のみ教えを社会に広め実践していく活動です。

宗門では、親鸞聖人750回大遠忌法要を迎えるにあたり、今日までの歩みを見直し、将来を見据えたあり方を模索し、そのあるべき姿を最高法規である『宗制』と『宗法』を改正して明示しました。

その『宗制』には、「本宗門は、その教えによって、本願名号を聞信し念仏する人々の同朋教団であり、あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献するものである」と記されています。

2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災やさまざまな災害からの復興に向け、宗門全体で、お互いに寄り添い支えあおうという取り組みを進めています。その中から私たちは、いのちのあり方を問う多くの声に接してきました。私たちは念仏者としてその思いに向きあい、応えていかなければなりません。

今こそ私たちは、今までの運動をさらに進め、親鸞聖人の生き方を仰ぎ、浄土真宗のみ教えを宗門内外に広げていかなければなりません。そのためにも、あらゆる人々が参画することのできるお寺と宗門をめざし、人々の苦悩に向きあい、ぬくもりのある活動を展開することが大切です。

お念仏のみ教えを、混迷の社会を導く灯火として高く掲げ、人々に広く伝えながら、誰もが心豊かに生きることのできる御同朋の社会の実現をめざして歩みたいと思います。

別に定める重点プロジェクトをもとに、実践運動に取り組みましょう。

2012（平成24）年3月27日策定

## ② 重点プロジェクト基本計画

推進期間2011(平成24)年度から2014(平成26)年度までの3年間

### 「御同朋の社会をめざす運動」(実践運動)

お釈迦さまは、生老病死という人間のかかえる究極的な苦悩への問いかけを契機として、出家され、仏教を説かれました。また、親鸞聖人は、災害と戦乱の中世にあって、苦悩の中にある人びとを救う真実の教えをお示しく下さいました。人びとの苦悩とともに生き抜くということが、わたしたちの大切にしているみ教えの根本にあるのです。

親鸞聖人は、「小慈小悲もなき身」と自身の無力さを嘆かれました。しかし、聖人は、世を捨て家を捨てた隠棲の出家者となられたのではなく、自ら家庭を持ち、市井に生きる人びとと苦悩をともし、お念仏の道を歩まれました。聖人を慕うわたしたちは、いかに無力の身であっても、常に聖人の生き方を鏡として、わが身を振り返りつつ、人びとの苦悩に寄り添っていかなければなりません。その思いが、わたしたち宗門の活動を表わす「御同朋の社会をめざす」という言葉にこめられています。

宗門を構成する門信徒、僧侶、寺族、そして寺院やさまざまな団体は、それぞれの地域にあって、各地の特性を活かしながら、人びとに寄り添う、貴重な活動を熱心に実践してこられました。その活動の成果によって、み教えが人びとの生活の依りどころになり、町や村の人びとをつなぎ、伝統的な日本社会の礎となってまいりました。

「実践運動」とは、こうした伝統を継承し、お念仏の教えを基本として、宗門全体で未来を創造していく活動です。「実践運動」には、全員が参画する運動として目標を広く共有するため、「総合テーマ」を掲げます。宗門は、この「総合テーマ」のもと、宗門内外の人びととつながりながら、具体的な社会活動を実践してまいります。また、各地で実践されている活動の情報を集め、その知恵や経験を宗門の大切な財産として集約し、宗門全体にお伝えしていきたいと考えています。

「実践運動」では、寺院を核とする「自他共に心豊かに生きることのできる社会」を実現するために、「総合テーマ」を掲げ、ネットワークを築き、具体的な社会貢献をめざして、活動を推進していきます。

## ③ 総合テーマ

### 「そとつながる ホッがつたわる ～結ぶ絆から、広がるご縁へ～」

東日本大震災以後、「絆」が時代を象徴する言葉になりました。絆とは、離れがたくつながりあっている関係を意味しています。悲痛な経験を通して、人と人との「つながり」の尊さへの気づきが始まっています。

さらに一歩踏み込んで、「つながり」のより深く広い意味を、仏教の立場から発信していくのが「ご縁」という言葉です。

「そと」とは、やさしく包みこむようにつながることを意味しています。「ホッ」とは、そうしたつながりの中で与えられる安心感のことです。こうした活動を通して、つながりの大切さが実感され、安心と温もりのある社会に寄与していきたいと

考えています。わたしたちは、大悲の<sup>だいひ</sup>はたらきに包まれている身として、「ご縁<sup>えん</sup>」の尊さ、大切さを、社会の中に広く浸透させていく活動を進めてまいります。

「ごえん」 人と人を結びつける不思議なめぐりあわせです。

「ごえん」 わたしたちが自覚する以前から、つながっています。

「ごえん」 わたしたちが認識している以上に、遠くまで広がっています。

「ごえん」 過去から現在、現在から未来へとつながっていきます。

「ごえん」 誰もがつながっていけることです。

「ごえん」 わたしとあなたのことです。

「ごえん」 わたしと仏さまのことです。

「ごえん」 わたしのいのちを支えているものです。

「ごえん」 わたしがここに存在していることそのものです。

「ごえん」 わたしはあらゆるものにつながっています。

親鸞聖人の言葉<sup>しんらんしやうにん</sup>を伝える『歎異抄<sup>たんいしやう</sup>』には、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」とあり、すべてのものがつながり合っていることが示されています。また、『教行信証<sup>きやうぎやうしんしやう</sup>』には「遠く宿縁を慶べ」と、仏の救いに出遇えたよろこびが「縁」という言葉で表現されています。阿弥陀如来の救いが、はるか遠い昔から、わたしたちを包んでくださっていることが、仏の縁と示されているのです。

また、「縁」とは、わたしが関係の中にあることを知らせ、自己中心的な考え方を省みさせる言葉であり、生死の中でめぐまれたつながりの尊さを教えてくれる言葉でもあります。

「無縁社会」といわれる中、「ご縁」という普遍的な言葉を通して、宗門内外の人びととつながり、ネットワークを創り、広がっていく活動を進めていきたいと考えています。

#### ④ 重点プロジェクトの「実践目標」設定

「重点プロジェクト」は、「総合テーマ」をもとに、活動主体がそれぞれ「実践目標」や具体的な「達成目標」などを設定して、成果を検証しながら、推進していくプロジェクトです。

「実践目標」は、期間（期限）を共通に3年間として総局が決定し、それが伝道本部（宗務所）の「実践目標」となります。しかし、地域のそれぞれの活動主体が、〔宗門の課題リスト〕を参考に、それぞれの特性に応じて、独自に「実践目標」を定め、活動を推進することもできます。

例えば、伝道本部（宗務所）では、〔宗門の課題リスト〕から「災害支援」を選択し、「実践目標」は「東日本大震災をはじめとする被災者への支援」としましたが、活動主体によっては、「子育て支援」、「葬送儀礼」などを選択し、活動を進めることもできます。

重点プロジェクト推進室では、こうした活動に対して、情報提供などの支援を行っています。また、各活動主体のさまざまな取り組み、各地の実践事例を提供いただき、それを集約、発信いたします。このように「重点プロジェクト」では、実

践事例を有機的に結びつけ、課題を共有しつつ、宗門全体の社会活動がより充実したものとなるよう、計画的に推進されます。

⑤ 宗門の課題リスト

第9回宗勢基本調査では、宗門に期待することとして、「人びとの苦悩に応える教団であって欲しい」という項目が、全対象者において最も多く選択されました。(住職56.4%、坊守56.4%、門徒41.1%)

この〈宗門の課題リスト〉は、社会情勢や宗勢基本調査などから浮かび上がってきた課題をもとに、伝道本部（宗務所）において検討しリストにしたもので、まさに人びとの苦悩に応える教団として取り組むべき課題でもあります。

これは、あくまでも一例ですが、それぞれの活動主体が「実践目標」を定める上での資料として準備しましたので、ご参考ください。

リスト	「実践目標」例	活動内容例
災害支援	東日本大震災をはじめとする被災者への支援	多様な技術や経験を持つ僧侶や門信徒などによるボランティアチームを結成し、被災地でその特性を活かした活動を行うことにより、被災者ところがつながる支援をする
		傾聴ボランティアを育成し、被災者の声を聴いて、少しでも安心につながる支援をする
		被災地の物産展やチャリティーバザーの実施により、義援金や支援金を集めるなど、復興を願う人びとがつながりながら被災者を支援する
		手芸などの手作り品やメッセージなどを贈り、被災者ところがつながる支援をする
		被災者、支援者の体験報告を行う。また、行政・宗門の被災・支援情報を提供することにより、被災者と支援者ところがつながる支援をする

リスト	「実践目標」例	活動内容例
環境問題	エネルギーやものを大切にすることを学ぶ	お寺で電灯を使わず過ごす経験などを通して、エネルギーの大切さを学ぶとともに、不便さの中で、ものの大切さや人と人とが助け合いつながりあうご縁の温かさを学ぶ
	自然環境を守ることを学ぶ	お寺に小規模の太陽光発電システムを設置し、電力を作る仕組みを子どもたちが学ぶ機会を提供する。また、ものの循環するシステムを学び、ものを大切にすることを養うことで、生活の中にあるさまざまなつながりを学ぶ
高齢社会	がっき 月忌参りによる ころの支援	お寺や地域の門信徒が生産する食材を用いた食事会を開き、生産者から米や野菜などが育つ過程を学び、食物を無駄なく使うことの大切さを体験することで、いのちのつながりを学ぶ
	お年寄りを中心とした ご縁づくり	将来に豊かな大地を遺すために、植樹を行い、自然や環境を守る温かいところを後世につなげる。「本願寺の森」に登録し、全国に広がっていく活動へと展開する
	高齢者施設における ころの支援	月忌参りを行い、お年寄りや介護にかかわる家族とふれあい、そのつながりの中で、老病死に寄り添う
ターミナル ケア	患者や家族への ころの支援	お寺で、お年寄りが昔話や体験談を語るなど、子どもたちと交流し、お年寄りがいきいきと活躍でき、子どもたちも人生体験を学べる場を提供することによって、ころ温まるご縁づくりを行う
		ビハーラでの学びを活かして、高齢者施設を訪問し、施設利用者や家族、施設職員とのつながりの中で、苦悩に寄り添う
ターミナル ケア	患者や家族への ころの支援	病院や患者宅を訪問し、『ころのお見舞い(響・光)』を贈るなど、患者やその家族とのつながりの中で、老病死や愛別離苦に寄り添う
		病院で募集するボランティア(「病院ボランティア」)に参加することにより、患者やその家族とそとつながる

リスト	「実践目標」例	活動内容例
子育て支援	キッズサンガによる子どもたちへの支援	キッズサンガ（お寺を子どものこころ安らぐ居場所にしていこうとするもの）に取り組むことにより、子どもから大人まで、地域とお寺がつながっていく環境をつくる
	子育てしやすい地域、環境をつくる	お寺で、門信徒や僧侶のさまざまな資格や趣味を活かし、親子が一緒に参加、参拝できる場づくりをし、地域の親子とお寺をつなげる
		地域で子育て中の世代がつどい、相互交流や悩みを相談できる場としてお寺を提供することにより、地域の親子とお寺をつなげる
		児童虐待や犯罪被害などから子どもを守る駆け込み寺や関係機関につなぐ機能を果たすことで、地域とお寺のご縁をつくる
自死自殺	苦悩を抱える人の居場所づくり	掲示板を用いるなどして、お寺が苦悩に寄り添う場であることを伝え、ほっとできる居場所を提供する
	月忌参りによる取り組み	話を聴くための研修会に参加するなど、傾聴のできる相談員を養成して相談窓口を開設し、苦悩などを抱えた方とつながり、安心できる居場所を提供する
		月忌参りを行い、孤独を抱えている様子が窺える場合、時間を充分にとり、そっと寄り添い丁寧に話を聴く活動（かかりつけのお坊さんとしての活動）を進める
		仏教における自死の見方を学ぶ学習会を開き、自死に対する無理解と偏見を減らし、苦悩を抱えた方にとって居心地の良い社会づくりをする
自死遺族へのこころのサポート	追悼法要や遺族会を開き、自死遺族のこころのサポートを行い、温もりのある社会の実現をめざす	

リスト	「実践目標」例	活動内容例
葬送儀礼 <small>そうそうぎらい</small>	葬儀を行う意味を伝えていく <small>そうぎ</small>	大切な人の死を通して、生きることの意味や如来の救いの尊さを知らされていく、という葬送の本来の意味を、葬儀や僧侶のあり方を研鑽することによって、再生させていく。その活動を通して、死別の悲嘆に寄り添い、受けとめることのできる社会づくりに寄与していく
	遺族へのこころの支援 (グリーフケア)	臨終、通夜、中陰などで積極的に遺族と会話し、つながりをつくり、グリーフケアを行うことで、苦悩に寄り添う
日常の 寺院活動	地域と寺院とのつながりを大切にする	門信徒や僧侶が、周辺地域を含めたお寺の清掃活動を行うなどして、お寺の「外」にかかわる活動を進め、地域とつながるお寺づくりをすすめる
	地域につながる人と人のつながりの育成	壮年会や婦人会のメンバーが、子どもたちの安全を守るなど、地域社会に貢献する活動を行い、地域社会における人と人とのつながりを、お寺を拠点として作り出していく

## 第2章 兵庫教区の取り組み

1990（平成2）年11月、神戸ワールド記念ホールにおいて、**兵庫教区御同朋** ひょうごきょうくおんどうぼう **総結集大会** そうけつしゅうたいかいが約7千人の僧侶・門信徒参加のもとに開催されました。

この大会は、1985（昭和60）年に兵庫教区の新しい組の編制がなされ組画変更の意義を共有し、御同朋の社会の実現のために各組が取り組んできた成果を発表し合う契機となりました。兵庫教区は、なぜ組画変更にしたのかという理由として、何点かあげることができます。

- ① 兵庫教区には明治時代からの封建遺制のもとに編制された組があり、これを解消し寺院間の交流を正常化する。
- ② 伝統のある寺院の組や戦後の新しい寺院の組の閉鎖的な矛盾を解消する。
- ③ 交通・生活圏の変化にともなう教化伝道や宗務上、行政上の不便を解消する。

ことなどがありました。

その一つの「封建遺制の組」とは、差別・被差別からの解放の視点をもたず、従来から引き続けられてきた組のことです。社会的にも差別の温存助長の要因ともいわれ、解放団体をはじめマスコミなどからも強い指摘がありました。

そのことから当時の住職や門信徒の熱心な運動と理解の成果として組画変更事業がなされました。その大会の中において、「神戸別院改築と教化センター設立」が、宣言され賛同されました。

1992（平成4）年8月、「本願寺神戸別院復興についての消息」が、即如ご門主より発布されました。老朽化していた神戸別院をより多くの僧侶が集える寺院に改築し、教区の教化活動の中心的拠点としていく施設を建てようという願いが、多くのご懇念によって実現しました。しかし、思いもよらない出来事がありました。

1995（平成7）年1月17日午前5時46分、**阪神淡路大震災** はんしんあわじだいしんさいの発生でした。工事着工の途中の大災害でした。阪神淡路地域の寺院を始め門信徒の多くに甚大な被害を被りました。言うまでもなく、救援と支援活動の日々が続きました。全国から支援ボランティアの人々138万人が、阪神淡路地区に来て下さいました。自分の寺院や自宅が被災している中でも互いに助け合いながら、この困難を乗り越えられたことは、決して忘れてはならないことであります。平成11年1月31日調べでは兵庫教区被災門信徒死亡届け出は、門信徒1,299名（教区内1,121名、教区外178名）、寺族11名、合計1,310名の方々が、亡くなられました。また、多くの方々が怪我をし、体調を崩していかれました。災害は、予想していても、どのようなかたちで私たちの暮らしに襲いかかってくるか解りません。阪神淡路大震災を教訓にして、私たちは防災減災に取り組まなければなりません。いのちの犠牲を少しでも少なくくい止める活動を日頃からしておかなければと思います。「自助・共助・公助」のなか、自らの生命を守ることは、第一ですが、次には、地域や、ご縁のある人々が、直後には大きな力となりました。見知らぬ多くの方が、世界中から支援活動をしてくださったことは、感謝してもし尽くせません。その思いを復興の支援活動に向けていければと考えます。

お陰で工事が完了し、竣工式が営まれました。1996（平成8）年10月18日から3日間にわたり、即如ご門主御導師のもと、「本願寺神戸別院・兵庫教区教化

センター完成記念慶讃御親修法要」が、にぎやかに営まれました。

1998（平成10）年、「蓮如上人500回遠忌法要」は、10期100日間にわたって本山本願寺で、ご修行されました。そして、この年を「蓮如イヤー」と位置付けて、全宗門人が、また一般の方々がご法要のご勝縁に会い、上人のご遺徳を鑽仰すると共に、ご法要修行の基調や総合テーマ、キャンペーンテーマを踏まえた活動事業をお取り越しとして進めるべく、本山をはじめ、教区や組や寺院で取り組みが行われました。地方（教区）における遠忌法要は、『蓮如上人500回遠忌法要についてのご消息』の意を体し、『蓮如上人500回遠忌総合計画』の趣旨に則り、営むものとなりました。その法要の意義と成果を平成10年の本山法要に結集し、新しい宗門の時代を切り開く礎となることを期し、寺院、組、教区のご法義の繁昌、活動の活性化を強力に推進していく願いと実践を踏まえた内容とすることをもって、法要修行が営まれました。

☆名 称	「兵庫教区 蓮如上人500回遠忌法要」
☆法要テーマ	「変革（イノベーション）」
☆キャンペーンテーマ	「環境」「家族」
☆大会テーマ	「第2回兵庫教区御同朋総結集大会」 「いのち・いのち・いのち」ーいのちの尊さをみつめてー

#### 《兵庫教区法要内容》

一、期 日	1997年（平成9）年7月14日（月）
二、会 場	本願寺神戸別院本堂
三、日 程	午前10時・午後2時 2座修行
四、参 拝 者	約1200人
五、法要差定	『奉讃蓮如上人作法』
六、ご 法 話	御 講 師 本願寺派勸学 大阪教区阿倍野組広台寺 梯 實 圓 師
七、ご 講 題	「御文章のこころ」

《蓮如上人記念行事》	「蓮如フェスタ イン 兵庫」
蓮如上人タベの集い	7月13日（日）16時～ 神戸別院 旭堂小南陵一門「蓮如上人誕生」
特別講演会	7月17日（木）13時半～ 神戸別院 福岡光超 師 「蓮如上人の伝道と教学」
布教大会	7月31日（木）10時～ 神戸別院 兵庫教区布教団「蓮如上人布教大会」
キャンペーンテーマ研修会	8月25日（月）10時半 神戸別院 本多隆朗 師 「イノベーション（環境・家族）」
特別講演会	8月25日（月）13時半～ 神戸国際会館ハーバーランドプラザ 五木寛之 師 「慈のこころ 悲のこころ」（900人）
布教大会	8月28日（木）10時～ 姫路（本徳寺） 兵庫教区布教団「蓮如上人布教大会」（200人）

蓮如上人に学ぶ 8月28日(木)13時～ 姫路(本徳寺)  
千葉乗隆 師  
「兵庫における蓮如上人教化の影響について」(同上)

## 第2回兵庫教区御同朋総結集大会

10月24日(金)・25日(土) 神戸国際会館  
高 史明 師 「いま、深いのちを見つめる」3000名

また、2001(平成13)年9月5日、神戸国際会館(三宮)においては、「兵庫教区御同朋結集二千人大会・同朋運動五十周年記念大会」が開催されました。この大会は、私たち念仏者が、同朋精神を基軸とした教団の体質・システムを創るとともに、組画変更の本旨を継承し、御同朋の社会を築くための念仏者として主体的な生き方を確立することが誓われました。さらに、2002・2003(平成14・15)年には、その実践に努め各組での結集大会を開催し、その成果を持ち寄り2004(平成16)年の「兵庫教区御同朋総結集一万人大会」をめざす大会として開催されました。

そして目標と掲げられた「兵庫教区御同朋総結集一万人大会」が、遂に2004(平成16)年10月31日、神戸ウイングスタジアムにおきまして、大谷光淳新門様(当時)ご臨席のもと、教区内僧侶・門信徒1万3千人が集い盛大に開催されました。

式典では、参詣者が万を超えた蓮如上人ご在世の吉崎御坊さながらに、会場を震わさんばかりの「正信念仏偈」が勤められ、参加者全員の思いを一つにしました。大会では、三つの提言がありました。

①「組画変更20年からの提言」では、20年前の組画変更の理念こそ、我が兵庫教区念仏者の共通の理念であり、常に教区同朋の諸活動のよりどころとしての原点であること、そして原点に立ち帰りその思いを新たに阿弥陀様に聞き伝えていくことが提言されました。

②「大震災10年からの提言」では、大震災は、一瞬にしてすべてのものを、奪ってしまいました。しかし、阿弥陀様をご縁とした私を支えてくださった多くの方がいました。大震災から10年、社会状況は、激しく変化しましたが、大震災で知った「いのち」への願いや思いを伝える家庭学校を開設して子ども達と触れ合いの場所を作っていくことも今後必要ではないだろうか。また、その後、地震・台風・水害等が、各地で被害を起こしています。あらゆる災害時に、敏速な指示と適切な救援が出せるように、組織の中に専門部署の設置やボランティアの登録、初期救援物資の備蓄等を切に望みますと提言された。

③「御同朋の社会をめざして」では、同朋運動の宮みは、自らのいのちの尊さに気づかせて頂くと同時に、お互いのいのちを尊重し合う人間関係が生み出されます。それは、今の私の信心のありようが、いつも問われることでもあります。しかし、私たちの教団は、社会の誤りをそのまま教団内の体質や人間関係に持ち込み、親鸞聖人の御同朋、御同行のお心に背いた制度・生き方を許してきた歴史があります。今こそ御同朋の精神に反する制度・生き方を糾し、自己中心的な人生から、周囲の人へのやさしい心配りのできる念仏者の集まりとして教団づくり教区づくりをしなければなりません。特に、人権問題や環境・平和問題に念仏者として積極的な態度

を示していくことが提言されました。

科学技術や産業の高度化は、生活を豊かにした半面、私たちの人間としての生き方に多くのゆがみをもたらし、地域社会の共同性が薄れました。少子高齢化・核家族化・単身世帯の増加は、伝統的な地縁、血縁関係に代わる、新たな人間社会の再構築が望まれています。いのちの尊さに目覚めた私たち念仏者は、人類の生存や尊厳を脅かす国の内外の諸問題にも真摯に向き合い、御同朋の社会の実現に努力することが阿弥陀様のご恩に報いることと提言されました。

また、思い起こしますと、大会を前にした10月20日夕刻から夜にかけて近畿地方を直撃した台風23号は、各地で土砂崩れや、浸水を引き起こし、全国で90人、兵庫県内だけで21人の死者・行方不明者を出し、但馬では円山川と出石川の堤防が決壊して汚泥が市街を覆い、淡路では土砂崩れが、民家をのみ込みました。その他千種川流域などでも被害が出ました。その影響で、この大会に参加を予定していた教区内の門信徒312人が参加できませんでした。大会では、その災害に対して参加者から義援金が募られその額は245万円を超えました。

2008（平成20）年11月2日には、即如ご門主ご臨席のもと、兵庫教区の基幹運動の重点項目の一つとして取り組んできた「第19回全国仏教壮年兵庫大会」が開催されました。ポートアイランドのワールド記念ホールを会場に全国から4,500名にも及ぶ仏教壮年の門信徒が結集しました。兵庫教区から全体の半数を超える2,300名もの参加者がありました。これには準備段階として進めた結成・未結成を問わず全ての寺院から壮年層代表の名簿提出（各寺院2～3名）や各組での協力と取り組みが大きな成果となりました。この大会を契機に仏教壮年会を結成し登録単位を促進していくことを目標としてきましたが、仏教壮年会活動の認知度は高まりましたが、単位結成登録の促進については、現在も課題に掲げられ推進しています。

長島愛生園・邑久光明園 西本願寺会館50周年記念の集いについて少し述べますと、兵庫教区の基幹運動では、ハンセン病の国立療養所長島愛生園・邑久光明園（岡山県瀬戸内市）があることからハンセン病問題に取り組んできました。2007（平成19）年度よりハンセン病専門部会において推進し、2008（平成20）年12月18日、「長島愛生園・邑久光明園西本願寺会館50周年記念の集い」を差別解消に向けての決意を新たにすため開催しました。法要では即如ご門主様が、かねてから療養所の門信徒の希望であった帰敬式を行われました。お言葉の中で「み教えの大事な点は、すべての人が分け隔てなく救われることにあります。御同朋・御同行として今日の社会問題に光を当てる大切な意味があります。（ハンセン病問題への）理解は、進んでいます。課題は多くあります。少しでも前進できることを願います。」と述べられました。私たちは、そのお言葉の意味を深く受け止めなければなりません。

### 差別発言事件の惹起について

2009（平成21）年1月20日、某組同朋講座において、同朋講師による差別発言がありました。その発言は、「被差別地域の〇〇」とことわって、ご門徒の『出自』を明かすというものでした。「被差別地域の〇〇」と名ざされた地域の住民と当該寺院・当該寺院門信徒に対する差別発言であるだけでなく、いまなお部落差別に苦しむ人々にさらなる苦痛と恐怖心、そして宗門全体に対する大きな不信感を

与える発言でありました。

兵庫教区では、「兵庫教区同朋講座における差別発言事件」として対応委員会が設置され、対応要綱がまとめられました。事件の背景と問題点等から、この発言は、「被差別地域」と「そうでない地域」という「線引き」をし、被差別地域外に自分がいるという認識に立った、差別意識から発せられた発言でした。発言者本人の同朋運動への取り組みは、学習で得た知識的なものでしかなく、本願寺派布教使として、また同朋講師として、自らの信心のあり方を問い、自らの差別性に向き合い気づかされていくような取り組みとなっていなかったことが後に明らかとなりました。阿弥陀様の救いに出会い、現生正定聚の身を生きようとする筈の立場でありながら、差別に苦しむ僧侶・門信徒を『御同朋』として捉えることが出来ていなかったことが背景であり課題とされました。

兵庫教区では行為者の意識改革と被差別者の人権回復へ向けた取り組みをはじめ、行為者だけの問題とすることなく組や教区・宗門の課題を明かにし、差別・被差別からの解放をめざす取り組みを進めていくこととなりました。

しかし残念なことに、再び違う差別事件が惹起しました。2009（平成21）年12月下旬から翌年2月初旬にかけて、28通にも及ぶ大量の差別投書が、神戸別院・教区内寺院をはじめ大阪教区教務所や本山・真宗大谷派宗務所へありました。これらの投書の多くは、差出人が他の個人名を騙ったものであり、その内容は、多くの差別を意味する賤称語を用いて、個人を名ざしで誹謗中傷する人権侵害の差別文書でした。名ざされた人物や、投書の文面の内容から判断すると兵庫教区が取り組んできた基幹運動や「兵庫教区同朋講座における差別発言事件」への対応を批判否定する内容でした。さまざまな賤称語を用いて、個人をさして誹謗中傷したことは、被差別者に激しい痛みと憤りを与えるものです。今なお差別に苦しむすべての人々を貶め、いのちの尊厳を脅かす、卑劣で許されない行為です。

同朋教団を標榜していながら、これまで、私たちは、事件が起こるたびに、「他人事」の感覚で、被害者の激しい憤り、深い痛み、悲しみに寄り添えていなかったのではないかと反省せずにはおれません。差別していないから、自分には関係がないという態度で、いつも傍観者であったのではないかと。この私も差別に加担していたと気づかなければならないのです。今こそ、お念仏のみ教えに生かされる者として、同朋教団の一員として、同朋運動を進める具体的な姿勢を示して行く事が、私たちの責務であり社会的責任なのです。

兵庫教区は、まずはじめに今回の差別事件を検証するところから始めました。多くのことがあきらかになるにつれ、僧侶一人ひとりがこれまで以上に研修を深め、同朋精神に基づいた人権感覚を身に付けなければならないことが提案されました。

また、僧侶のあるべき姿を問い続け、行動原理であるはずの教義の研究を行い、「御同朋の教学の確立」を目指します。浄土真宗の教章にもあるように「自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」ことは、次世代に平等の社会を送り届ける営みであり、み教えに生きる人々が、一人でも多く誕生してもらいたいと願う私たち兵庫教区の願いでもあるのです。

### 第3章 親鸞聖人750回大遠忌法要関連

#### 「親鸞聖人750回大遠忌についての消息」発布

2005年（平成17）年1月9日、「親鸞聖人750回大遠忌についての消息」を即如ご門主が発布され、それに伴い2月7日、本願寺神戸別院本堂において「御消息披露総局巡回」が行われ、ご消息の主旨演達後、親鸞聖人750回大遠忌法要の修行と記念事業・教学伝道振興対策・寺院活動の推進・社会的活動・時代を担う人の育成・組織・財政・施設の整備などの宗門長期計画について説明がなされました。さらに、同年9月13日、「親鸞聖人750回大遠忌法要の円成に向けての兵庫教区総局巡回」が行われ、大遠忌円成にむけての協賛並びに参画をしていくこととなり、2006年4月より、「親鸞聖人750回大遠忌についての消息」披露と記念法要が、教区内全組で開催されました。

#### 教区教学テーマ『現生正定聚』

2006（平成18）年10月、親鸞聖人750回大遠忌を見通した兵庫教区における教学テーマを、『現生正定聚』とすることが決まりました。パンフレット・ポスターなどが作成され、教区や教化団体等・各組各寺院に至るまで、親鸞聖人の独自のみ教えである『現生正定聚』を研鑽しました。さらに基幹運動も一体となり研鑽ならびに伝道・広報が推進されました。

#### 兵庫教区・神戸別院大遠忌長期計画策定 ～全寺院総代・全寺院寺族婦人・仏教婦人総参拝～

2007（平成19）年、兵庫教区・神戸別院大遠忌長期計画が策定され、2011（平成23）年に本山で修行される「親鸞聖人750回大遠忌法要」を受け、教区においても前年度に「兵庫教区・本願寺神戸別院 親鸞聖人750回大遠忌法要」の実施が決定されました。

また、大遠忌の円成と法要お待ち受けの機運を盛り上げるために、2007（平成19）年10月1日から5日までの5日間、「親鸞聖人750回大遠忌法要お待ち受け 全寺院総代総参拝」が修行され、教区内寺院の総代1,300名（各寺院約2名）が参拝致しました。決意表明では、『現生正定聚』のみ教えを聞き、「いま、まさに、仏の智慧を得た仲間」として、このご勝縁を慶ばせていただき、次世代に伝え、御同朋の社会の実現に向けて現代社会に応える宗門の護持発展に一丸となって邁進することが決意されました。

翌年2008（平成20）年9月29日から10月3日までの5日間は、「親鸞聖人750回大遠忌法要お待ち受け 全寺院寺族婦人・仏教婦人総参拝」が修行され、1,900名が参拝し、さらにお待ち受けの機運が高まりました。

また、2009（平成21）年9月30日から10月4日までの5日間「親鸞聖人750回大遠忌法要お待ち受け 仏教壮年・門推総参拝」が修行され、1,400名が参拝し、翌年の「兵庫教区・本願寺神戸別院 親鸞聖人750回大遠忌法要」に向け、総代・寺婦・仏婦・仏壮・門推等が総参拝を終え、教区一丸となって大遠忌事業を

推進する体制が整いました。

2010（平成22）年5月26日、神戸国際会館こくさいホールにおいて、作家の五木寛之さんを講師として「兵庫教区・本願寺神戸別院大遠忌長期計画記念講演」が開催されました。参加対象をこれまで浄土真宗とあまりご縁がなかった方を対象とし、一般広報にて告知をしての講演でしたが、神戸新聞で五木さんが小説「親鸞」を連載されていたこともあり1,140名もの参加がありました。

8月22日・23日には、次世代にみ教えを伝えていく取り組みとして寺族婦人会・仏教婦人会・仏教壮年会連盟・少年連盟・青年僧侶の会の協力をいただき、本願寺神戸別院を会場に「親鸞聖人750回大遠忌法要 子どもの集い」が開催され幼少年が別院に集い、子どもたちみんなで阿弥陀様に手を合わせお勤めして、ご法話を聞かせていただきました。アトラクションでは、影絵劇やふれあい動物園などを楽しみました。お世話いただきました教化団体の皆様ご苦労様でした。

### 「兵庫教区・本願寺神戸別院 親鸞聖人750回大遠忌」

2010（平成22）年9月30日、本願寺神戸別院本堂を会場に、「兵庫教区・本願寺神戸別院 親鸞聖人750回大遠忌法要並びに別院改築落慶奉告法要」が即如ご門主の御親修で修行され、法要後、引き続き御親教をいただきました。法要は、10月1日から8日（4日を除く）かけて7日間、「兵庫教区・本願寺神戸別院 親鸞聖人750回大遠忌」修行されました。9月30日～10月8日までの8日間での参拝者は、4,200名を超えました。

また、法要中には、1階ホールにて人権パネル展や兵庫大学茶道部による抹茶接待（9月30日のみ）も開催されました。10月5日には、御影堂の常灯明から分灯された灯明が日本全国各地を回り兵庫教区へは四州教区から安穩灯火リレーの安穩号によって運ばれてきました。そして、その灯明から点燭され法要が修行されました。

これらの法要行事を教区にて行わせていただき、2011（平成23）年4月から翌年1月16日までご本山にて「親鸞聖人750回大遠忌法要」が修行されました。法要参拝者を始め行事参加者などを含め大遠忌法要でご縁を結んでいただいた方は、延べ1,448,087名となりました。その内、兵庫教区からの団体参拝の人数は25,788名でした。